

光明寺だより

第96号
浄土真宗本願寺派
光明寺

〒793-0030 西条市大町550
TEL 0897-53-4583



心に残る詩

東井義雄



しくじりはつらい

しかし しくじりは

自分に一番欠けているものを

教えてくれるために現あわれた

お使いかもしれないのだ

しくじりから学ぼう

失敗を大切にしよう

この「失敗」のおかげでと

言えるくらいに

失敗から学ぼう

友を選ぶなら

失敗しない人よりも

失敗を大切にする友を選ぼう

そして

自分もそういう自分になろう



新春法座

1月10日(水)

おつとめ 3時30分

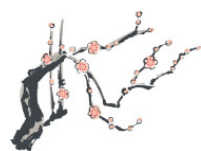
おはなし 4時

【講師】 三原市光徳寺前住

藤田徹文先生



仏とは「ハタラクキ」



中国宋代の詩人、載益たいえきという人の作った「探春」という詩を紹介いたします。

(★本文は末尾参照)

どんな内容の詩かと言いますと、

みんな「春が来た、春が来た」と言うが、その春とは一体どんなものか、私も一日中、野山を歩き回って探してみたがつかいに見つけることが出来なかった。意気消沈して家に帰り、庭先の梅の枝を見てみると、数日前まで固かったつぼみ蕾が膨らみ始めているではないか。そうか、春はすでにこの枝まで来ていたのだ。私は紛うことなき春を見つけたことが出来た。

このような詩であります。

この詩は、春（＝理想、尊いもの）は、遠くを探すのではなく、いつも身近にあるという教訓の詩だそうです。それだけでなく、事物の在り方について私たちに大切なことを教えてくれていると思います。

普通一般に、存在というと、色や形があった、見たり触ったり出来るものを言います。ところが、「春」というものには色や形はあ

りません。そうすると「春」は存在しないのかというと、詩の作者は庭先の梅の蕾が膨らみ始めている事実を見て「春が来た」と言っています。つまり、春には色形はないが、草花のいのちの芽を出させ花を咲かせる大自然の「ハタラクキ」として、やって来る、その事実を、「春が来た」と喜んでいるのです。そうすると、存在の仕方には次の二通りあるということになります。

①色、形があつて、見たり触ったりして確認出来るもの

②色、形がなく、見たり触ったり出来ないが「ハタラクキ」として存在するもの

そこで仏さまの存在の仕方ですが、仏さまは「ハタラクキ」として存在しているのです。どのような「ハタラクキ」とかという、すべての「いのち」を撰めとって捨てない（撰取不捨せんしゆふしや）というハタラクキです。

その「ハタラクキ」は、時間空間無限の広がりを持ったこの世界（全宇宙）のありとあらゆるもの（無量無阿ミダ）が、一つにつながる（縁起）ことによって生み出されたものです。

この「ハタラクキ」を仏と呼ぶのです。

お釈迦さまは、この世界にはそのような「ハタラクキ」が備わっているという真理・法

則を発見されたのです。

ニュートンが万有引力の「法則」を発見されたように、お釈迦さまはすべての「いのち」の存在を実現してくれる「法則」を二五〇〇年前に発見されたのです。

この真理・法則を「法」と呼びます。

「法」は、教え、真理（真如）、法則という意味ですが、それを人格的に味わう時、「法身（仏）」と言い、また私たち浄土真宗では「阿弥陀如来」と名付け、私たちの目覚めを促して下さる「ハタラクキ」（大行）として頂いてきたのです。

このように仏さまは「ハタラクキ」として存在しているのです。

親鸞聖人次のようなご和讃を作っています。

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

撰取して捨てざれば

阿弥陀となづけたてまつる

— 浄土和讃 —

意識すれば、廣大無辺のこの世界のすべての衆生を撰めとって捨てることがない、そういう撰取不捨の「ハタラクキ」を阿弥陀と申し上げる、というご和讃です。つまり、阿弥陀さまは「ハタラクキ」とし

て存在していることを示されたものです。

よく、「仏さんがおるんなら見せてくれ。

見せてくれたらわしも信じる」という人が
いますが、これは物の見方が逆なのです。

仏さまは「ハタラキ」として存在していま
すから、その「ハタラキ」を、この身に感
じるということがまず大事なことです。

そのためには、自分の計らいを捨てなけ
ればその「ハタラキ」を感じることは出来
ません。

計らいを捨てるとは、「私はこう思う」と
いう自分の見を捨てるといふことです。

そうして無心にその「ハタラキ」を我が身
に頂いていくのです。

「仏法は無我にて候」と蓮如上人が仰られ
たように、「私はこう思う」などというところ
には仏法はありません。そんな考え方が
要らなくなるということが仏法に出遭うと
いうことなのです。

そうやって計らいを捨てる事が出来れ
ば、撰取不捨の「ハタラキ」が我が身の
上に働いていることにハッキリと気づきます。

この私の「いのち」は無量のいのちの「ハ
タラキ」によって生かされて生きているん
だなあということに目覚めるのです。目覚
めれば当然、「ありがたいことだなあ。かた
じけないことだなあ」と頭が下がります。

その頭の下がったところに仏さまは現われ
るのです。それは「私の周りはすべて仏さ

まばかりだ」という目覚めです。

親鸞聖人は「弥陀如来は報・応・化、種々
の身を現じたもう」と仰っています。阿弥
陀さまはすべての「いのち」を救うために
千変万化しながら、ありとあらゆる姿をとっ
ておられるというのです。

あの人もこの人も、否、森羅万象あらゆる
ものがこの私の「いのち」を生かす仏さ
まだったと目覚めるのです。

道元禪師は「尽十方界真実人体」と仰っ
ています。この宇宙すべてが私の体である
と仰っているのです。

まさに「我以外皆我諸仏」です。

しかも、その「ハタラキ」は、冒頭の詩
の「春」のように、遠くに探すのではなく、
最も身近なところ、(今、ここ、我が身)
はたらいで下さっているのです。

何もかも 我一人の為なりき
今日一日のいのち尊し

何かも 我一人の為なりき
今日一日のいのち尊し



探春

(本文)

盡日尋春不見春 杖藜踏破幾重雲

歸來試把梅梢看 春在枝頭已十分

(読み方)

盡日春を尋ねて春を見ず

杖藜踏み破る幾重の雲

帰り来りて試みに梅梢を把って看れば

春は枝頭に在りて已に十分

「光明寺だより」を「家族の皆さんで
お読みください

★次回発行予定…2月中旬



秋の『彼岸会法座』開催！



9月21日(木)午後2時より、季平博昭先生をお招きして秋の彼岸会法座を開催いたしました。

今回は、昨年、伝灯奉告法要で新門主になられた専如ご門主の発布された「念仏者の生き方」というご親教(本紙94号に全文掲載)についてお話をしていただきました。

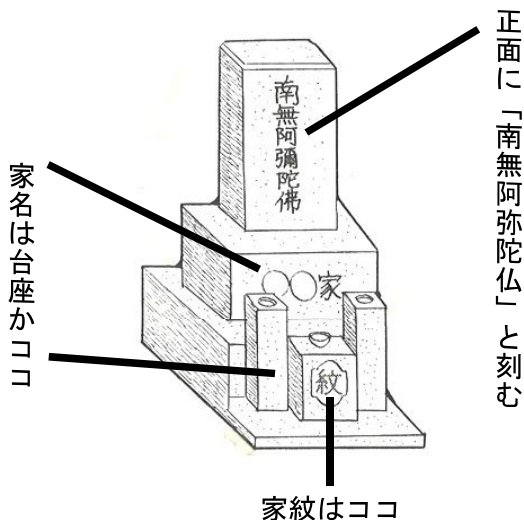
25名の参拝がありました。

【講演主旨】

お釈迦さまはこの世と私たちのありのままの姿に目覚め仏陀になりました。それは、「いのち」は

すべて繋がっているという真理法則(縁起の法)を発見されたのです。ところがその真理に目覚めない私たちは自分さえよければという自己中心の心でもって、欲を貪り(貪欲)腹を立て(瞋恚)愚かな日暮し(愚痴)を続けています。順調に事が進めば自分の手柄にし、思い通りにならなければ相手のせいにしてしまう、まことに粗末な日暮しを続けています。

親鸞聖人のお示し下さった阿弥陀さまの救いの法は、煩惱に覆われた私たちをそのまま救うというものです。あらゆるものを一つ如しと観る阿弥陀さまは、「あなたの幸せは私の幸せです」「あなたの苦しみは私の苦しみです」という大悲の心をお持ちです。その阿弥陀さまの優しさ、温かさが南無阿弥陀仏という呼び声となって、今、私のところにいたり届いているのです。念仏の教えは、「信じれば、病気を治します。お金が儲かります」というご利益宗教ではありません。しかし、どんな時でも私に寄り添い、いかなる時でも私と共に歩んで下さる阿弥陀さまのお心に包まれている喜びを感じずる時、いかなる苦難をも乗り越えていく勇氣と力が恵まれるのです。そうしてそのお心(温かさ優しさ)を我が心として、周りの人々に接していかうと努力する、それが「念仏者の生き方」なのです。



*浄土真宗にふさわしいお墓

- ① 正面には「南無阿弥陀仏」と刻む
- ② 墓相や方角にとらわれない
- ③ 霊標とせず法名碑とする
- ④ 水子地藏や五輪塔は建てない
- ⑤ 吉日の文字は刻まない
- ⑥ お墓建立時の法要は建碑法要(けんぺいほうよう)という

*お墓建立の注意点



平成30年度行事予定表

日時	行事名	講師
1月10日(水)午後4時	新春特別法座	備後教区光徳寺前任・藤田徹文師
1月16日(火)	正月参拝	
3月15日(木)午前9時	涅槃会	
3月23日(金)午後2時	彼岸会法座	大阪教区法栄寺前任・小林顯英師
8月13日(月)14日(火)	新盆合同追悼法要	
8月16日(火)	お盆参拝	
9月28日(木)午後2時	彼岸会法座	備後教区法光寺住職・季平博昭師
11月下旬予定	報恩講	日時・講師未定
12月31日(木)	除夜会・元旦会	

行事の変更、追加があれば本紙にてお知らせいたします。

法座(1月・3月・9月・11月)には出来る限り参拝しましょう。

報恩講つとまる!



さる12月4日(月)「報恩講」が営まれました。報恩講は宗祖親鸞聖人のご命日に当たり、聖人のご恩をしのび、聖人によって開顕された凡夫じきにゆう直入のお念仏のみ教えに出遭わせていただいたことを喜んでいくという、浄土真宗では最も大切な仏事です。本年は初めて、ご講師に西条組内の長敬寺住職・塩崎隆徳師をお招きいたしました。若手布教使らしく真面目で若々しい講演態度で、参拝者の皆さんには大変好評でした。

お念仏のみ教えは、阿弥陀さまの智慧に見抜かれることによって自らの愚かさを知り、「だからこそ救わずにはおれないんだよ」というお慈悲の心に包まれてあることを喜んでいく教えだということをお話いただきました。25名の参拝者がありました。

本年の法座皆勤者に次の10名の方々でした。

越智敏子・永井初江・野間和幸・野間幸子・松本朱美・真鍋磨智子・森延子・森本隆雄
安永省一・安永敏枝(敬称略)

趣味の広場



俳句を楽しむ(七十五)

森本隆を

今年ももう十二月。例年この時期の句稿は冬とか歳末の自然、人事などを取り上げた俳句を取り上げてきました。今年は少し趣おもむきを変えてみようと思います。最近、テレビや新聞では今上天皇のご退位のご意向が伝えられ、それを尊重したご譲位の話題が盛んであります。平成という時代も来年で三十年。新しい元号(年号)の話がちらほら。ならば今のうちにこの平成という時代の俳句の総括をして、最も印象的な作品を探るのも面白いのでは、と思います。そこでまず今回は「平成俳句の総括。冬の部」とでもしましょうか。

忘年や身ほとりのものすべて塵ちり 桂 信子
 淡々と冬日は波を渡りけり 稲畑 汀子

たまたま、女流俳人の作品を二句、初めにあげましたが、冬に入りいよいよ師走といった季節の句ですね。ともに、いかにも人生の達人が季節から感じるものを詠んだ句ですが、前句は自分の人生感、後句は眼前の大景、にそれぞれ自分の感慨をさりと託して詠んでいます。

寒晴やあはれ舞妓の背の高き 飯島 晴子
 雪虫にあらす雪舞ひそめにけり 清崎敏郎
 冬の季節感を瞬時にとらえた句と言えますが、前句は人事の面白みを軽く交え、きりつとした寒晴の日の空気をたたえた句です。後の句は初雪の瞬間を何の工夫もせずそのまま詠みとめた素晴らしい句ですね。

しぐれ忌や木曾の地酒の澄みを酌み

上田五千石

数え日の地下を地上へ幾曲り 鈴木六林男
 すべからく俳人は人を愛し風情を愛し旅を愛するものですが、この二句はそういった俳人の本性の真骨頂のような句です。まず前句。酒盃に注がれた地酒の澄み切った様子に、今日は俳聖芭蕉の忌日であるという思いを重ねて詠んだ旅先の句で、「しぐれ忌や」という季語が実に巧みですばらしい句です。二句めは年末のあわただしく動き回って用を足す自分の姿を地下道でとらえた、俳句らしい「こっけい」というかユーモアというか、思わず表情がゆるむような句で、都会的な雰囲気の中です。

いくさ呪のろひをれば句も凍こつ人も凍こつ

石原 八束

雪の田の一本の杭記憶せよ 津田 清子
 平成の俳人、とはいえ、活躍する人たちは大正から昭和にかけて生まれた年代の人ですから、昭和の記憶が原点にある俳人も多数います。心のずっと底の方には強く反戦とか平和への思いを秘めた作品も多く、この二句のような句も多くあります。その思いを露骨

に言葉そのもので伝えるのではなく、心の中で昇しょうか華して句に湛たえた佳句としてこの二句をあげました。そういった、奥深くに強く持った思想に支えられた作品とはまったく違った分野で残る作品の中から最後に二句あげてみます。

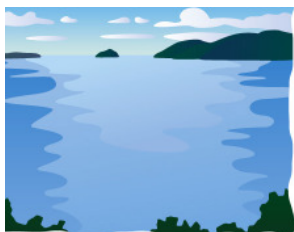
冬蝶の夢に見むとある伽藍がらんかな 藤田 湘子

冬麗の不思議をにぎる赤ン坊 野沢 節子

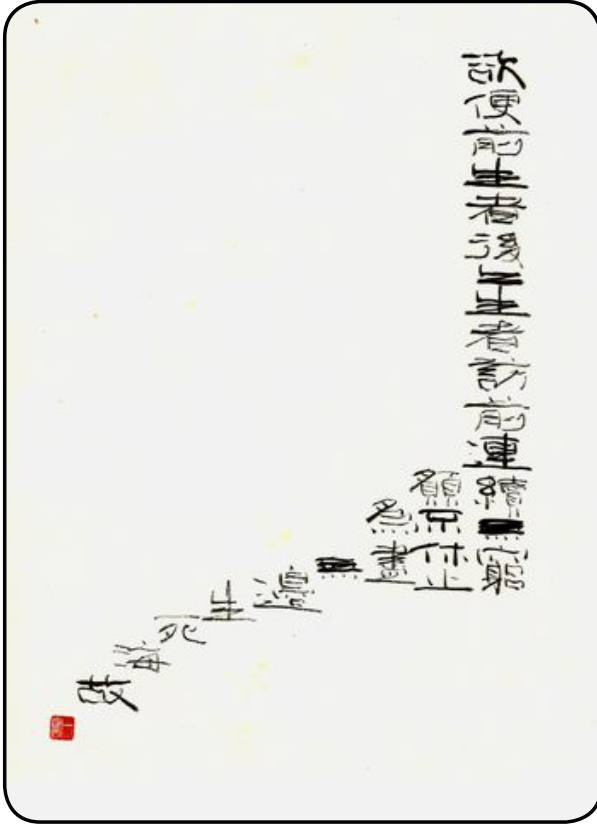
片や広く暗い伽藍の一隅にひっそりと眠るようにいる冬の蝶に、そしてもう一方は固く手を握りしめ陽の当る窓辺で眠る赤ン坊に、それぞれ、明るい未来というか希望のようなものを感じている句ですね。

今回は私の個人的な好みに従って平成になってからの俳句作品のごく一部の中から冬の句として好ましいものを十句抜きました。

年末年始、健やかに過ごして下さい。 合掌



位職書作品



字句 欲便前生者導後生者訪前連続無窮願不休止

読み

為盡無辺生死海故

前に生まれん者は後を導き、後に生れん者は前を訪へ

連続無窮にして、願はくは休ませざらしめんと欲す

無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり

『安楽集』(道綽)の一節

BOOK 本



新春法座にご講師としてお招きしている藤

田徹文先生の著書です。先生は平成元年より

ご自坊で若手僧侶中心の勉強会(迦羅羅塾)

を開かれています。今回、当塾の三十周年

を記念して、塾生が順次法話集を刊行するこ

とになりました。そのトップバッターとして

先生の法話集が刊行されました。全26話が掲

載されており、一話一話が大変わかりやすく

書かれています。

本書のあとがきに、『私が一貫して求め続け

てきたことは「私とは何か」ということである。

本当の暗闇を知らないものには、光の本当の

ありがたさが実感できません。光の中で生か

されてきたありがたさ、光の中で生きている

勿体なさ、光の中で生かされ続けるしかない

かたじけなさを感佩せずにはおられません』と

語っておられます。

発行者 探究社
著者 藤田徹文
定価 2000円(税別)

除夜の鐘

12月31日(日)

午後11時45分



言葉のプレゼント

枯れ落ち葉
生かす大地と
なりたまふ



平成30年度年忌早見表

該当者に年忌通知表を配布していますが、下記の早見表を参考に自宅の過去帳で確認して下さい。

回忌	死亡の年号
1周忌	平成29年
3回忌	平成28年
7回忌	平成24年
13回忌	平成18年
17回忌	平成14年
25回忌	平成 6年
33回忌	昭和61年
50回忌	昭和44年
66回忌	昭和28年
100回忌	大正 8年
150回忌	明治 2年
200回忌	文政 2年
250回忌	明和 6年
300回忌	享保 4年

光明寺のホームページ

南岳山光明寺

検索



★8月11日(木) 駐日ブラジル大使が拝観に来られました。

★9月21日(火) 季平博昭先生をお迎えして秋の彼岸会法座を開催いたしました。25名の参拝者がありました。

(*関連記事5ページ)

★12月4日(月) 午後2時より報恩講が勤まりました。ご講師は、組内寺院である長敬寺住職・塩崎隆徳師でした。小雨の降るなか、25名の参拝者がありました。

